



鈴木 浩司（生物学）

セイタカアワダチソウは悪者か。

秋になると日当たりの良い空き地（休耕田や河川敷）にセイタカアワダチソウの大きな群落が出現します。名前は知らなくても見たことがない人はいないぐらい秋の風景の一部となっていますが、そもそもセイタカアワダチソウは日本に自生せず、明治期に北アメリカから移入された外来種です。その繁殖力の強さから、戦後にその分布域が急拡大し、全国で見られるようになり、その結果、もともと生育していた在来植物はその生育地を奪われることになりました。実際に在来植物の生存に関してどのような影響があったかは分かりませんが、負の影響はあったにしても正の影響があったとは思えません。したがって、セイタカアワダチソウは在来植物にとって悪者であり、在来植物の生育環境を守るために駆除すべき植物ということになります。もちろんそうすべきだと思うし、そういう活動をしている地域もあります。

今年 6 月から「外来生物法」によりペットとして馴染みのあるアメリカザリガニやアカミミガメが条件付特定外来生物に指定されました。両種は特に水域の生態系に甚大な悪影響を及ぼすということで、自宅でペットとして飼う分には構いませんが、それを野外に放流したり、販売することは禁止されました。植物でも現在 19 種の外来種が特定外来生物に指定され、栽培や販売が禁止されています。これらの規制により、在来種の生育環境が守られることを期待するわけですが、一方でセイタカアワダチソウのように明治期頃に国内に侵入した多くの外来植物は指定されていません。理由は定かではありませんが、一つには現在ではそれら外来種が地域の生態系に十分に溶け込んでしまっていることが考えられます。例えば、セイタカアワダチソウは在来植物の生息地を奪っているかもしれませんが、秋にこれほどの大量の花を咲かせる在来植物は他にあまりなく、結果として、セイタカアワダチソウの花には多くの昆虫たちが花粉や蜜を求めて訪れており、その昆虫類を狙うクモなどもあり、在来の昆虫たちの生活、さらには地域の生物多様性の維持に貢献しているように見えるからです。もし、セイタカアワダチソウを除去してしまったら、それに代わるような在来の植物がなければ、昆虫たちの生活基盤が失われ、それらの個体数の減少、局所的には居なくなるなどの影響があるかも知れません。

外来種問題の難しいところはここにあります。すでに地域生態系の一部となっている外来種を単に「外来種」というだけで悪者にするのではなく、地域生態系にどのような影響を与えているのかを十分確認することが、外来種問題を考える上で重要です。



キチョウ



ヤマトシジミ



ツマグロキンバエ